

「未来社会の仏教と私」

—原始仏教からのメッセージ—

大本山増上寺研修生 三 宮 瞳 穂

「釈尊に帰れ」という言葉を私が初めて耳にしたのは、今から数年前のことだったと思う。僧侶の墮落、そして葬式仏教といわれる仏教に対する皮肉であり、戒めであり、奮起の言葉であります。当時、私も一人の僧侶として、そのあり方に疑問を持つており、「これでいいのか、これでいいのか」と、自分自身の中で暗中模索しておりました。そんな中「釈尊に帰れ」というこの言葉の響きは、私にとって、とても魅力的なものであり、何か一つの光を与えてくれる

ような、そんな予感をさせる言葉だったのです。そしてその言葉通り、一からの釈尊の教えを、ひもといてみようという想いにかられたのです。これが、私の原始仏教との出合いでありました。そして、そこに説かれている教えを学んでいくにしたがつて、私が、イメージしていくまでの仏教とは、だいぶ異なった仏の教えが現れ、それは私にとって全く別の新鮮なものとして映し出されたのです。と同時に、釈尊の説かれた教え、精神を素直に受けとり、

それを未来の人々へ受け渡していかなければならぬのだということに、思ひがするようになつたのです。

原始仏教とは、時期的にいえば、釈尊がブツ

タガヤの菩提樹の下で、悟りを開いた時から、クーシナガルにて入滅し、その後数百年までの間の仏教のことといい、いわゆる大衆部と上座部との根本分裂がおきるまでの仏教のことです。そして、その教法とはまさしく現実的であり、即時的であり実証的であり、いわば常に現実を素材とするものであり、現実に立脚する教えであつたと思うのです。

釈尊、存生の頃、インドの地において時の宗教家・思想家が好んで問題としていた事に四類十種の難というものがあります。いわゆる十四無記といわれるものです。

1. 世間は常住であるか、無常であるか（常住であつてしかも無常であるか、常住でもなく、無常でもないか）
2. 世間は有辺であるか、無辺であるか（有辺であつてしかも無辺であるか、有辺でもなく、無辺でもないか）



3・身と命とは、同じであるか異なるか

4・人間は、死後存在するか、存在しないか、存在して、しかも存在しないか、存在するのでもなく、存在しないのではないか。

これらの問題に対して、釈尊は、それを問題にすることが、仏教の実践において、無意味であることを、原始仏教の代表的な經典「阿含經典」の中において「毒箭の譬え」をもつて功みに説いているのです。あえて、今ここにその一節を紹介したいと思います。

ここに一人の人があつて、毒矢をもつて射られたとする。その時、彼の友達は、いそぎ彼の為に医者を迎える。ところが、彼はまず、わたしを射た者は何びとであるか、わたしを射た矢は、いかなる弓であるか、又その矢はどんな形をしているか。それらのことが解明されぬうちに、この矢を抜いてはならぬ、治療してはならぬと、主張したならば、どんなことになるのだ

ろうか、彼はまだそれらのことを知り得ないうちに死んでしまうであろう。世界は有限か無限か、靈魂とは身体は同じか別か、人間は死後も尚、存在するか否か、そのような問題に答えたと、われらの苦なる人生の解決にはなり得ないのだ。われらは、この現在の生において、この苦なる人生を克服しなければならぬのである。

——中部經典六三摩羅迦小經

中阿含經二二一箭喻經

これによつて見るならば、釈尊が常に問題とするところは、現実の人間のものであつたといふことが、明瞭であります。釈尊においては、超経験的なことを論ずるということは、すべて、無記であり、問題として論じてはならないことであり、戯論であるとして排斥せられているのです。そして、その教えの説き方は極めて現実的であり、かつ人間的であり、そこにはまさし

く生活に即した仏教が語られているのです。又その求めるものは、今をいかに「明るく」「仲よく」「正しく」生きるか、いや生きぬくかの『共生』の一言に尽きるのだと思います。

今の日本は、経済的には恵まれた状態にあります。世の中に不正や腐敗が多くみられ決して精神的には豊かでないことは常にいわれてい



ることです。又現在の日本の仏教のあり方についても客観的な目で觀察して見ると、少なくとも私の目には、よい方向にあるといえない部分が多くみられるようになります。仏教が、今日起こっている社会的な問題に対しても積極的な対応が十分になされていないということも一つの原因があるともいえます。又それは、日本の社

会に対しても同様のことがいえます。

伝教大師が、弘法大師が、なぜ命をかけて唐へ渡ったのか。道元禪師が入宋して禪の中に何を求めたのか、法然上人が、日蓮上人が、なに故念仏を、お題目を唱えることを主張したのか。それには、時代時代の背景があり、又一見超経験的なことを説いているかのようにみえます

が、その根底には、釈尊が常に今を見つめ現実の問題を解決されようとしたように、各祖師方も、それぞれ、今自分が生きている社会、現実を素直に受けとり、深く自己を見つめ、反省するという立場にたつて、

今の時代を、どうとらえるか

今をどう生きるか

今何をなすべきか

今何をしてあげられるか
といつたことを常に深く考えられていたと思うのです。それが、「釈尊に帰れ」「祖師に帰れ」

ということであり、その中から「未来に釈尊の教えを生かす」「未来に祖師の教えを生かす」出发点になるのではないかと思うのです。そのように、一度、原点に帰つてみるとことによつて、未来の社会に向かつて仏のお教えのすばらしさを伝えていくことができるのではないでしょうか。

しかし今の私に一体何ができるのか、何をなすべきなのかということになると、悲しいかな今の私には、まだその答えを見い出すことができない。ドアの前に立つているだけでそのドアをどう開けたらよいのか迷つてゐるのです。それ故に悩み、苦しみ、立ち止まつたままでいるのです。今の私にできることは釈尊の教え、祖師の教えを学び守り、その命を受け継ぎ、一人の求道者として生きていいくことだと思うのです。この問題を現実をふまえて解決していく方法を見つけたいと考えています。